

氏名	松岡 多恵
ヨミガナ	マツオカ タエ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第369号
学位授与年月日	令和4年9月30日
学位論文等題目	萩原朔太郎の詩による声楽作品と宗教性：詩と音楽の解釈の新たな可能性を求めて

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(大学院音楽研究科)	永井 和子
(副査)	東京藝術大学	教授	(大学院音楽研究科)	福島 明也
(副査)	東京藝術大学	教授	(大学院音楽研究科)	櫻田 亮
(副査)	東京藝術大学	教授	(大学院音楽研究科)	杉本 和寛
(副査)	東京藝術大学	教授	(大学院音楽研究科)	塚原 康子
(副査)	青山学院大学	教授		広瀬 大介
(副査)				三縄 みどり

(論文内容の要旨)

本論文は、日本近代詩を代表する詩人である萩原朔太郎（1886-1942）を中心に採り上げ、詩人が追求した「詩の音楽性」や、その特異な宗教観、精神世界の考察を踏まえることで、実際の演奏に繋がる「詩と音楽の解釈」の新たな可能性を提示することが狙いである。芸術的文学作品である「詩」が「歌」になるとき、そこには音楽によるテキストの再生産が存在していると考えられる。つまり、声楽家が日常的に触れている「歌」は、作曲家が読んだ「詩」に他ならない。この仮定をもとに、本論文では「詩」そのものの分析と解釈を経て、作曲家の読んだ「詩」の解釈を、その音楽から導き出す。

序章では、本研究の背景と方法を提示し、実際に本論で扱う萩原朔太郎の詩による声楽作品を絞り込んだ。声楽家にとって必要になる詩の「読み方」について、①黙読、②朗読、③読解の3つの手段を挙げ、その中から、これまで深く掘り下げられてこなかった③読解に注目し、「詩」と「音楽」の読者である声楽家の立場から、如何に分析・解釈すべきかを提示した。

第1章では、文学的側面から「詩」と「詩人」について検討することで、萩原朔太郎の詩につながる基本的な情報を整理した。まず、朔太郎に繋がる流れを追って日本近代詩史を検討することで、近代詩の起こりから、口語自由詩が完成されるまでの大きな変遷を確認した。次に、朔太郎詩を考えるにあたって特に重視すべき「キリスト教」と「象徴詩」、さらに「詩の音楽性」について検討し、西洋的思想のひとつとしてのキリスト教の影響や、西洋が生んだ「象徴主義」の受容について、加えて朔太郎が重要視していた「心内の節奏(インナアリズム)」について確認した。これらを踏まえて、最後に、朔太郎本人の詩の変遷、詩法を、歌曲で多く扱われる1923年頃までの作品に焦点を絞って確認している。

第2章、第3章では、実際に朔太郎の詩に付曲された声楽作品を採り上げ、それぞれの作品の「詩」について考察したのちに、作曲家がその「詩」をどのように読みとり、音楽によって表現したのかを分析・考察した。

第2章では、石渡日出夫、別宮貞雄、團伊玖磨、三善晃、西村朗、木下牧子の6人の作曲家の歌曲作品18曲を挙げ、考察を深めた。その結果、ひとつひとつの詩についての詩人の工夫や背景を確認しただけでなく、6人の作曲家それぞれが朔太郎の詩に向き合い、それぞれの音楽語法や工夫によって、詩の内容を表現していることを確認できた。

石渡日出夫は作曲家自身の抒情性によって、詩人の抒情に寄り添うように曲をつけていた。別宮貞雄は、

朔太郎の詩が表出するさまざまなイメージから、その本質を鋭く捉え、詩の性質そのものを音に表した。團伊玖磨は、詩からみえる音に対して、現実的な音楽を与えながら、象徴詩人としての朔太郎の詩の二重性を生かした作品を生み出した。三善晃は、朔太郎の詩を自身の外側に眺めるのではなく、内側に持ち続けることで、「詩」を自身の音の響きの中に存在させていた。西村朗は、言葉によるドラマ性を音程関係によって立体的に描き出し、詩人の苦しみや恐怖、「怒り」の感情を拾いあげて自身の音楽へ転化していた。木下牧子は、詩を構築している要素ひとつひとつを読み取って音に表現し、詩のドラマを自身の音楽で構築し直していた。こうした「詩」と「音楽」の分析に、筆者自身の演奏研究に基づく解釈を行うことにより、それぞれの楽曲にさらに一步踏み込んだ見解を得た。

第3章では、歌曲作品の枠を超えた朔太郎詩による声楽作品として、三善晃によるオーケストラ作品《ソプラノと管弦楽のための“決闘”》を考察した。この作品では、ピアノと歌という最小の構成からなる歌曲とは異なり、雄弁な楽器をいくつも内包するオーケストラの中に、ソプラノ歌手が言葉を持つ楽器として位置づけられている。この作品の考察からは、まさに作曲者によるテキストの再生産、ともいえる作曲方法を見出すことができた。この作品において音が表しているのは、朔太郎の詩の精神そのものであり、それは作曲者にとってすでに朔太郎の詩ではなく、自身のテキストであった。こうした作品では、「言葉」を持つ声楽家には、あたかも「詩」が音楽の中から生まれたように歌唱するための、感性と技術が要求されている。また、《決闘》において三善が選んだ朔太郎の3つの詩、「靈智」、「白夜」、「決闘」を深く考察することによって、朔太郎の精神世界について理解を深められたことも、大きな成果である。

これまで、声楽家による詩の研究はディクショングルや詩句の内容、その背景の考察にとどまっていたが、本論文では特定の詩人に繋がる詩史や詩法を検討し、詩人の世界観を深く掘り下げることによって、作曲家が再生産した「テキスト」を見出し、より深く捉えることができた。本研究は、これまで声楽家が検討してきた多くの詩の解釈に、さらに踏み込む余地があることを提示し、日本歌曲の分野における今後の演奏研究の可能性を広げる点において、大きな寄与をなすものである。

(総合審査結果の要旨)

声楽家が声楽作品を演奏する上で、従来ともすれば作曲家によって音楽化された作品に基づいて詩を読み解くのが常であったのに対し、本論文の目標としたことは、申請者自身の詩の解釈を文学作品の角度から深化させた上で、詩の読み手の一人である作曲者の解釈を譜面から読み取り、更にそれをアンカーとして作品を音にする声楽家の立場から演奏表現に忠実に還元することである。この研究からこれまでにない声楽家独自で深みのある考察を可能にした。

第2章、3章において萩原朔太郎の詩を扱った5人の作曲家（石渡日出夫・別宮貞雄・團伊玖磨・三善晃・木下牧子）の各歌曲作品の分析における申請者自身の詩の解釈は、それだけを取り上げても朔太郎の詩の解釈にひとつの地歩を築いているものであり、更にその成果が付録として付けられたアナリーゼにおいて重要な基盤となっている。これらのことから論文のみにその評価対象を限定したとしても非常に大きな成果をおさめていると判断できる。申請者が掲げていた「日本近代詩とキリスト教」という視点も萩原朔太郎という中心軸を設定したことによって行論が具体化し、詩と音楽の探求に資するものになったと言える。

ただ、序章においてロラン・バルトやウンベルト・エーコを援用しながら分析・解釈の方向性を説明しようとしたことは咀嚼が不十分であることとも併せて不要であり、これは申請者自身の言葉での説明のみで十分である。又、第1章の宗教に関する記述や象徴主義の取り扱い方などにも、定義の不明確さや議論の曖昧さがあり、ある程度の修正が必要となるであろう。これは2章、3章において膨大な先行研究に丹念にあたった上でバランスの取れた解釈と具体的な主張が見られるだけに惜しまれる点である。

特筆すべきは、こうした論文上の成果が実際の学位演奏会における歌唱に遺憾なく結実していることである。(2022年7月23日(土)第6ホール)

第一部（Ⅰ）[萩原朔太郎の詩による歌曲作品]團：旅上、三善：《抒情小曲集》全5曲、石渡：洋銀の皿、
團：《萩原朔太郎に依る四つの詩》全4曲

（Ⅱ）木下：涅槃。西村朗：輪廻、石渡：仏陀或は「世界の謎」。

第二部[萩原朔太郎の詩によるオーケストラ作品]三善：ソプラノと管弦楽のための《決闘》全3曲。

考え抜かれた選曲・プログラム構成で朔太郎の詩から立ち現れた音楽世界が作曲家個々人の作風の違いを越えて曲群ごとに共鳴し合い、オーケストラと切り結んだ圧倒的な終曲に至るまで強い緊張感に貫かれた濃密な時を共有した。論文での緻密な探求に裏付けられ、これ程の長丁場を一分のゆるみもない美しい声での歌唱力・発語力による表現でホールを満たしていた。

申請者の悲願でもあった三善の《決闘》上演は様々な困難を乗り越えて指揮科や学生有志の特段の協力を得ることにより学位演奏会の実現に至った。このこと自体が本学の博士課程における教育研究の醍醐味と言えるものであり、実技系博士課程における研究の範たるべきひとつの方向性を示している。

本研究は日本歌曲の今後の演奏の可能性を広げる点において大きな寄与をなすものとなろう。以上、博士学位取得に十分値する研究成果であり合格とした。